

「米沢市立西部小学校いじめ防止基本方針」

1 はじめに

いじめはどの子どもにも起こりうる、どの子どもも被害者にも加害者にもなりうるという事実を踏まえ、児童の尊厳を保持することを目的に、教育委員会、学校、地域住民、家庭、その他の機関及び関係者との連携のもと、いじめ問題の克服に向け、未然防止、早期発見、早期対応・組織的対応等に全力で取り組むものとする。

2 いじめの定義及びいじめに対する本校の基本認識

(1) いじめの定義の確認

「いじめ」とは、「児童等に対して、当該児童等が在籍する学校に在籍している等当該児童と一定の人間関係にある他の児童が行う心理的又は物理的な影響を与える行為（インターネットを通じて行われるものを含む）であって、当該行為の対象となった児童等が心身の苦痛を感じているもの」と捉え、個々の行為が「いじめ」に当たるか否かの判断は、表面的・形式的に行うことなく、いじめられた児童の立場に立って行うものとする。加えて、けんかやふざけ合い、好意で行った行為でも、児童が感じる被害性に着目し、いじめに該当するか否かを柔軟に判断することも必要である。

<いじめの態様>

- ① 冷やかしかからかい、悪口や脅し文句、嫌なことを言われる
- ② 仲間はずれ、集団による無視をされる
- ③ 軽くぶつかられたり、遊ぶふりをして叩かれたり、蹴られたりする
- ④ ひどくぶつかられたり、叩かれたり、蹴られたりする
- ⑤ 金品をたかられる
- ⑥ 金品を隠されたり、盗まれたり、壊されたり、捨てられたりする
- ⑦ 嫌なことや恥ずかしいこと、危険なことをされたり、させられたりする
- ⑧ パソコンや携帯電話（スマートフォンを含む）等で誹謗中傷や嫌なことをされる 等

(2) いじめの解消

いじめの解消とは、以下の①、② の要件を満たす必要がある。

- ① 「いじめに係わる行為が止んでいること」被害者に対する心理的行為または物理的影響を与える行為が止んでいることが相当の期間継続していること（少なくとも3ヶ月以上）
- ② 「被害児童が心身の苦痛を感じていないこと」（被害児童本人およびその保護者に面談等により確認する）

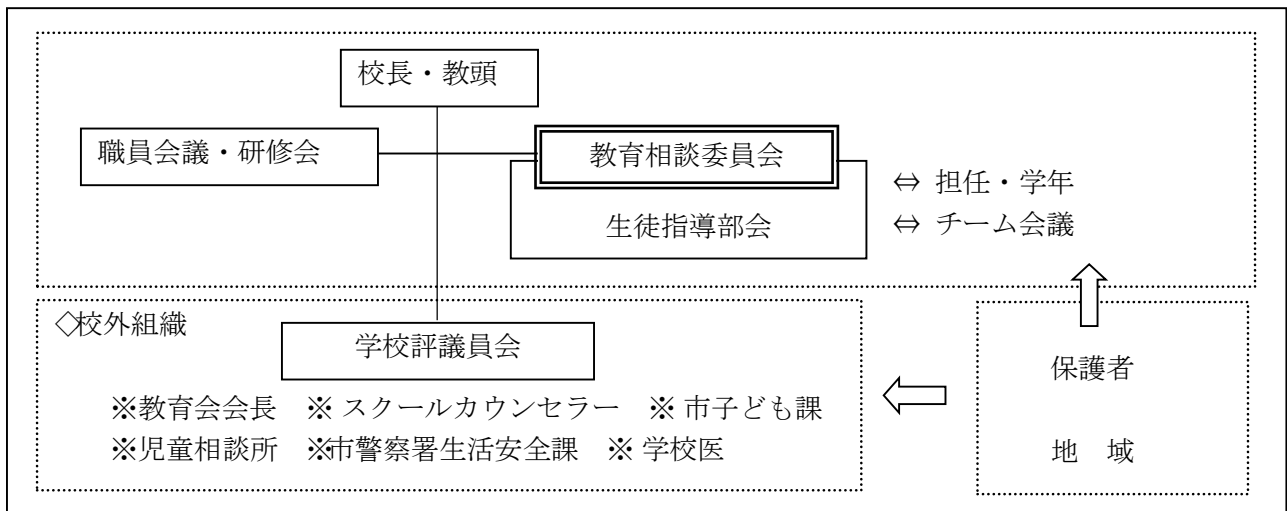
(3) 教育的諸課題等から特に配慮が必要な児童について

学校として、日常的にその特性を踏まえた適切な支援・指導を組織的に行う

- ・ 発達障がいを含む、障がいのある児童
- ・ 海外から帰国した児童や外国人の児童
- ・ 性同一障がいや性的指向・性自認に係る児童
- ・ 被災地児童 など

3 いじめ防止のための組織と具体的な取組

(1) いじめ防止のための組織図



(2) 校内組織

「教育相談委員会」

構成員：校長、教頭、主幹、教務主任、生徒指導部長、養護教諭、
特別支援教育コーディネーター、当該学級担任、当該学年主任 等

- ※ 学校いじめ防止基本方針に基づく取組の実施や具体的な計画の作成・実行・検証・修正等を行う。
- ※ 必要に応じ、課題を抱えた児童について、現状や指導についての情報の交換、及び共通行動についての話し合いを行う。
- ※ いじめの疑いに関する情報や児童の問題行動等に係る情報の収集と記録、共有を行う。
- ※ いじめの疑いに係る情報があった時には緊急会議を開き、いじめの情報の迅速な共有、関係児童への事実関係の聴取、指導や支援の体制・対応方針の決定と保護者との連携等の対応を組織的に行う。

(3) 家庭・地域、関係機関と連携した組織

「学校評議員会」

- ※ 年2回の定例会を開催し、本校児童の様子や教職員の児童への対応について参観いただき、評価していただくとともに、本校の課題解決に向けた助言をいただく。
- ※ 本校のいじめの防止に向けた対策に対し、措置を実効的に行うための助言をいただくとともに、本校の対策に関する評価、改善策の検討を行う。
- ※ 本校児童の様子についての情報交換を行うとともに、共通実践する内容を設定し、家庭・地域が一体となった指導を行う。

4 いじめ防止のための取組

(1) 教職員による指導について

- ・ いじめの態様や特質、原因・背景、具体的な指導上の留意点などについて、校内研修や職員会議等で周知を図り、平素から教職員全員の共通理解を図っていく。

【校内研修・職員会議】

- ・ 児童に対して、全校集会や学級活動などで校長や教職員が、日常的にいじめの問題について触れ、「いじめは人間として絶対に許されない」との雰囲気や学校全体に醸成していく。【全校朝会・学級活動・特別の教科道徳】
- ・ 常日頃から、児童と教職員がいじめとは何かについて認識を共有する手段を講ずる。(何がいじめなのかを具体的に列挙して目につく場所に掲示する、学校だよりに掲載する等)【掲示・学校だより】
- ・ 一人一人を大切にしたい分かりやすい授業づくりを進め、授業についていけない焦りや劣等感などが過度のストレスとならないようにする。【校内研究の日常化・個別の学習支援】
- ・ 教職員の言動が児童を傷つけたり、他の児童によるいじめを助長したりすることのないよう、指導の在り方に細心の注意を払う。【体罰ゼロの学校づくり】

(2) 児童に培う力とその取組

① 児童に培う力

- ・ 他人の気持ちを共感的に理解できる豊かな情操
- ・ 自分の存在と他人の存在を等しく認め、お互いの人格を尊重する態度
- ・ 児童が他者と円滑なコミュニケーションを図る能力
(自他の意見の相違があっても、互いを認め合いながら建設的に調整し、解決していける力や、自分の言動が相手や周りにどのような影響を与えるかを判断して行動できる能力を育てる。)
- ・ ストレスに適切に対処できる力
(ストレスを感じた場合でも、それを他人にぶつけるのではなく、運動・スポーツや読書などで発散したり、誰かに相談したりするなど、ストレスに適切に対処できる力を育む。)
- ・ 自己有用感、自己肯定感

② その取組

- ・ 学校の教育活動全体を通じた道徳教育や人権教育の充実、読書活動・体験活動などの推進。【特別の教科道徳の時間を中核に、正しいことをやり抜く気持ちや規範意識の向上を図る】
- ・ 一人一人を大切にしたい分かりやすい授業づくり 【わかる楽しい授業づくり】
- ・ 一人一人が認められ、活躍できる集団づくり 【学級経営の充実】
- ・ 自分の役割をきちんと果たすことで、他者の役に立っていると感じ取ることのできる機会の設定 【委員会活動・係活動】
- ・ 目標や目的を明確にし、主体的に取り組むことを通して困難な状況を乗り越えるような体験の機会の設定 【学校行事、委員会活動、生活科・総合的な学習】
- ・ 社会参画活動の推進 【地域行事への参加・協力】

(3) 児童の主体的な取組

- ・ 児童会によるいじめ撲滅の宣言や相談箱の設置等、児童自らがいじめの問題について主体的に考え、いじめの防止を訴えるような取組を推進する。このような主体的な取組をとると、「いじめられる側にも問題がある」「大人に言いつける(チクる)ことは卑怯である」「いじめを見ているだけなら問題はない」等の考え方は誤りであることや、ささいな嫌がらせや意地悪であっても、しつこく繰り返したり、みんなで行ったりすることは、深刻な精神的危害になること等を学ぶ。
- ・ 児童会がいじめの防止に取り組む事は推奨されることであるが、熱心さのあまり教職員主導で児童が「やらされている」活動に陥ったり、一部の役員等だけが行う

活動に陥ったりすることなく、教職員は、全ての児童がその意義を理解し、主体的に参加できる活動になっているかをチェックするとともに、教職員は陰で支える役割に徹するよう心がける。

(4) 家庭・地域との連携

- ・ 教育会総会、学年、学級懇談会、家庭訪問、学校（学級）だより等を通じて「学校いじめ防止基本方針」について理解を得るとともに、地域や家庭に対して、いじめの問題の重要性の認識を広めながら緊密な連携協力体制を図っていく。
- ・ 学校、家庭、地域がネットいじめを含めたいじめの問題について協議する機会を設け、地域と連携した対策を推進する。

5 早期発見の在り方

(1) 見えにくいいじめを察知するための具体的な対応

- ・ いじめは大人の目に付きにくい時間や場所で行われたり、遊びやふざけあいを装って行われたりするなど、大人が気づきにくく判断しにくい形で行われることを認識し、日頃からの児童の見守りや信頼関係の構築等に努め、児童が示す小さな変化や危険信号を見逃さないようアンテナを高く保つとともに、職員打合せや学年会等を活用し、教職員相互が積極的に児童の情報交換、情報共有を行い、いじめを積極的に認知するよう努める。
- ・ 定期的なアンケート調査に基づき児童一人一人と学級担任が1対1で話をする機会を設定する。短期におけるいじめの全体像を把握しながら、定期的な教育相談・日常の観察による声かけを実施することにより、個別の状況把握に努める。また、児童が日頃からいじめを訴えやすい学級経営や信頼関係の構築に努める。
- ・ 休み時間や放課後の雑談の中などで児童の様子に目を配ったり、「生活カード」等の教職員と児童の間で日常行われている日記等を活用して交友関係や悩みを把握したり、個人面談や家庭訪問の機会を活用する。

(2) 相談窓口などの組織体制

- ・ 相談の窓口は、教頭及び主幹教諭とする。
- ・ 児童や保護者の悩みを積極的に受け止められているか、定期的に体制を点検し児童及びその保護者、教職員が抵抗なくいじめに関して相談できる体制を整備する。
- ・ 教育相談等で得た児童の個人情報については、対外的な取扱いの方針を明確にし、適切に扱う。
- ・ 児童に対して多忙さやイライラした態度を見せ続けることは避ける。
- ・ 児童の相談に対し、「大したことではない」「それはいじめではない」などと悩みを過小評価したり、相談を受けたにもかかわらず真摯に対応しなかったりすることは絶対にしない。

(3) 地域や家庭との連携について 等

- ・ より多くの大人が子供の悩みや相談を受け止めることができるようにするため、学校と家庭、地域が組織的に連携・協働する体制を構築する。

6 いじめに対する措置（早期対応・組織的対応）

（1）素早い事実確認・報告・相談

- ・ 発見・通報を受けた場合には、特定の教職員で抱え込まず、速やかに学年主任・主幹教諭に報告し、組織的に対応する。
- ・ 遊びや悪ふざけなど、いじめと疑われる行為を発見した場合、その場でその行為を止め、事実確認を行い、いじめた児童へ適切に指導する。軽微な事案でも、関係職員へ連絡し、以後の見守りに生かす。
- ・ 児童や保護者から「いじめではないか」との相談や訴えがあった場合には、真摯に傾聴する。また、ささいな兆候であっても、いじめの疑いがある行為には、早い段階からの確に関わりを持つ。その際、いじめられた児童やいじめを知らせてきた児童の安全を確保する。
- ・ いじめる児童に対して必要な教育上の指導を行っているにもかかわらず、その指導により十分な効果を上げることが困難な場合において、いじめが犯罪行為として取り扱われるべきものと認めるときは、いじめられている児童を徹底して守り通すという観点から、ためらうことなく米沢警察署と相談して対処する。なお、児童の生命、身体又は財産に重大な被害が生じるおそれがあるときは、直ちに米沢警察署に通報し、適切に援助を求める。

（2）発見・通報を受けての組織的な対応

- ・ 発見、通報を受けた教職員は躊躇なく、校内の「教育相談員会」に報告し組織的対応を図る。その後は、当該組織が中心となり、速やかに関係児童から事情を聴き取るなどして、いじめの事実の有無の確認を行う。事実確認の結果は、校長が責任を持って学校の設置者に報告するとともに、被害・加害児童の保護者にも連絡し、事後の対応に当たる。

（3）被害者への対応及びその保護者への支援

- ・ いじめられた児童から、事実関係の聴取を行う。その際、いじめられている児童にも責任があるという考え方はあってはならず、「あなたが悪いのではない」ことをはっきりと伝える等、自尊心を高めるよう留意する。また、児童の個人情報の取扱い等、プライバシーには十分に留意して以後の対応を行う。
- ・ 家庭訪問等により、その日のうちに迅速に保護者へ事実関係を伝える。いじめられた児童や保護者に対し、徹底して守り通すことや秘密を守ることを伝え、できる限り不安を除去するとともに、事態の状況に応じて、複数の教職員の協力の下、当該児童の見守りを行う等、いじめられた児童の安全を確保する。
- ・ いじめられた児童にとって信頼できる人（親しい友人や教職員、家族、地域の人等）と連携し、いじめられた児童に寄り添い支える体制をつくる。いじめられた児童が安心して学習その他の活動に取り組むことができるよう、必要に応じていじめた児童を別室において指導する等、いじめられた児童が落ち着いて教育を受けられる環境の確保を図る。状況に応じて、スクールカウンセラー、教員経験者・警察官経験者など外部専門家の協力を得る。
- ・ いじめが解決したと思われる場合でも、継続して十分な注意を払い、折りに触れ必要な支援を行う。また、事実確認のための聴き取りやアンケート等により判明した情報を適切に提供する。

（4）加害児童及びその保護者への対応

- ・ 教育的配慮の下、毅然とした態度で加害児童を指導する。その際、謝罪や責任を

形式的に問うことに主眼を置くのではなく、社会性の向上等、児童の人格の成長に主眼を置いた指導を行うことが大切である。

- ・ いじめたとされる児童からも事実関係の聴取を行い、いじめがあったことが確認された場合、複数の教職員が連携し、必要に応じてスクールカウンセラーや教員・警察官経験者など外部専門家の協力を得て、組織的に、いじめをやめさせ、その再発を防止する。また、事実関係を聴取したら、迅速に保護者に連絡し、事実に対する保護者の理解や納得を得た上、学校と保護者が連携して以後の対応を適切に行えるよう保護者の協力を求めるとともに、保護者に対する継続的な助言を行う。
- ・ いじめた児童への指導に当たっては、いじめは人格を傷つけ、生命、身体又は財産を脅かす行為であることを理解させ、自らの行為の責任を自覚させる。なお、いじめた児童が抱える問題など、いじめの背景にも目を向け、当該児童の安心・安全、健全な人格の発達に配慮する。児童の個人情報取り扱い等、プライバシーには十分に留意して以後の対応を行っていく。いじめの状況に応じて、心理的な孤立感・疎外感を与えないよう一定の教育的配慮の下、特別の指導計画による指導のほか、警察との連携による措置も含め、毅然とした対応をする。
- ・ 教育上必要があると認めるときは、学校教育法第 11 条の規定に基づき、適切に、児童に対して懲戒を加えることも検討する。ただし、いじめには様々な要因があることに鑑み、懲戒を加える際には、主観的な感情に任せて一方的に行うのではなく、教育的配慮に十分に留意し、いじめた児童が自ら行為の悪質性を理解し、健全な人間関係を育むことができるよう成長を促す目的で行う。又、状況に応じて出席停止制度の活用について米沢市教育委員会と協議する。

(5) 集団へのはたらきかけ

- ・ いじめを見ていた児童に対しても、自分の問題として捉えさせる。たとえ、いじめを止めさせることはできなくても、誰かに知らせる勇気を持つよう伝える。また、はやしたてるなど同調していた児童に対しては、それらの行為はいじめに加担する行為であることを理解させる。なお、学級全体で話し合うなどして、いじめは絶対に許されない行為であり、根絶しようという態度を行き渡らせるように指導する。
- ・ いじめの解決とは、加害児童による被害児童に対する謝罪のみで終わるものではなく、被害児童と加害児童を始めとする他の児童との関係の修復を経て、双方の当事者や周りの者全員を含む集団が、好ましい集団活動を取り戻し、新たな活動に踏み出すことをもって判断されるべきであることを指導する。また、全ての児童が、集団の一員として、互いを尊重し、認め合う人間関係を構築できるような集団づくりに努める。

(6) ネットいじめへの対応 等

- ・ ネット上の不適切な書き込み等については、被害の拡大を避けるため、直ちに削除する措置をとる。名誉毀損やプライバシー侵害等があった場合、プロバイダに対して速やかに削除を求めるなど必要な措置を講じる。こうした措置をとるに当たり、必要に応じて法務局又は地方法務局の協力を求める。なお、児童の生命、身体又は財産に重大な被害が生じるおそれがあるときは、直ちに米沢警察署に通報し、適切に援助を求める。
- ・ 早期発見の観点から、学校の設置者等と連携し、学校ネットパトロールを実施することにより、ネット上のトラブルの早期発見に努める。また、児童が悩みを抱え込まないよう、法務局・地方法務局におけるネット上の人権侵害情報に関する

る相談の受付など、関係機関の取組についても周知を図る。

- ・ パスワード付きサイトや SNS（ソーシャルネットワーキングサービス）、携帯電話等のメールを利用したいじめなどについては、より大人の目に触れにくく、発見しにくいいため、校内における情報モラル教育を進めるとともに、保護者においても学年・学級懇談会、学校だより等で積極的に理解を求めていく。

7 重大事態への対処

(1) 調査組織の設置と調査の実施

- ・ いじめにより、当該児童の「生命、心身又は財産に重大な被害」が生じた疑いがあると認められた時、又、いじめにより、当該児童が「相当の期間（年間30日を目安とする）学校を欠席することを余儀なくされている疑いがあると認められた時、重大事態への対処、発生防止に資するため、下記の第三者による調査組織を設け、質問票の使用、その他の適切な方法により重大事案に係る事実関係を明確にするための調査を行う。

<重大事案と想定されるケース>

- 児童が自殺を図った場合
- 身体に重大な傷害を負った場合
- 金品等に重大な被害を被った場合
- 精神性の疾患を発症した場合 等

<組織の構成>

※校内における「教育相談委員会」を母体としつつ、置賜教育事務所「いじめ解決支援チーム」の支援・協力を得る。

（具体的な調査組織の構成員については米沢市教育委員会の指示を仰ぐ）

- 弁護士
 - 精神科医
 - 学識経験者
 - 心理や福祉の専門家等の専門的知識及び経験を有する者
- 「○」の構成員は、当該いじめ事案の関係者と直接の人間関係又は特別の利害関係を有しない者（第三者）とする。

(2) 重大事態の報告

- ・ 当該調査に係る重大事態の事実関係、その他の必要な情報等について、素早く米沢市教育委員会を通じて米沢市長へ報告する。

(3) 外部機関との連携 等

- ・ 重大事案に係る事実関係の調査、及び事後対応、発生防止等については、必要に応じ米沢市教育委員会、米沢警察署、児童相談所、置賜教育事務所の「いじめ解決支援チーム」と連携を図りながら進めていく。

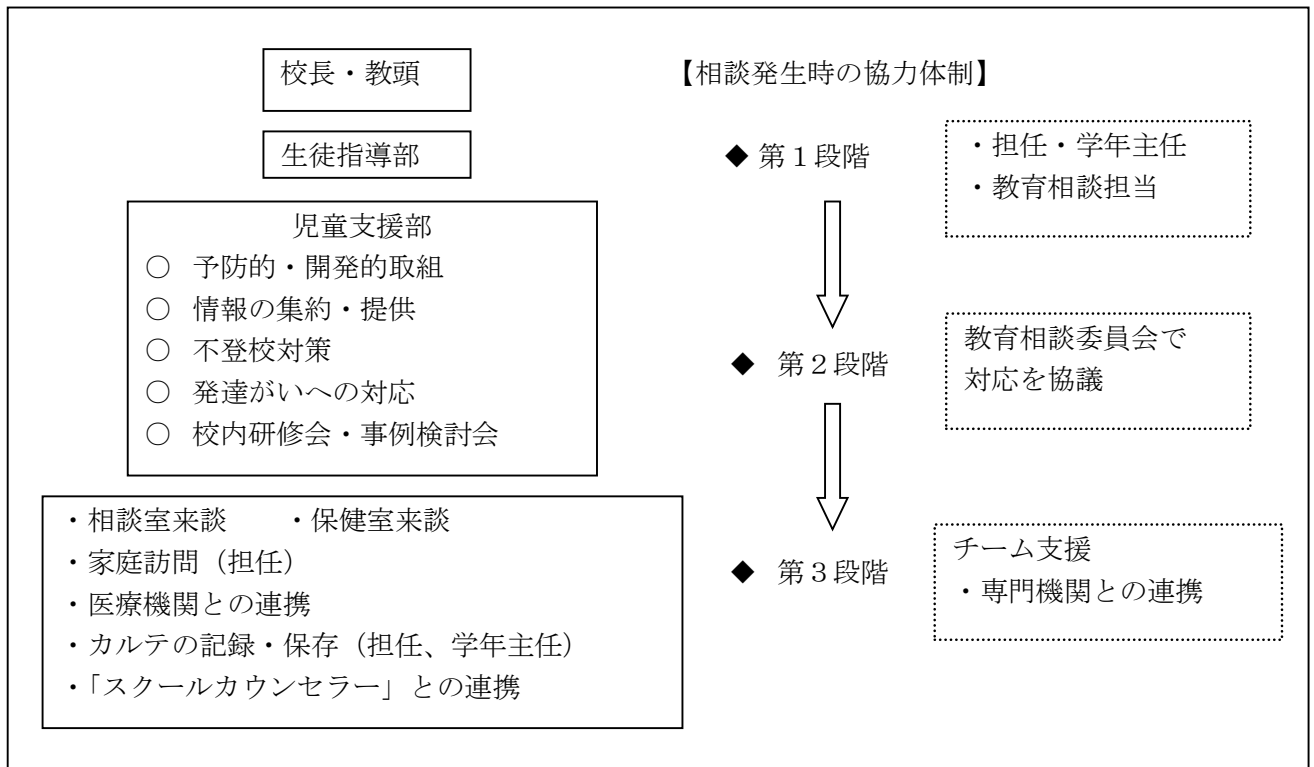
8 教育相談体制・生徒指導体制

(1) 教育相談のねらいと相談体制

①ねらい

- ・ アセスの実施、それを受けた個別面談を通し、児童の心の声を拾いあげ、いじめの問題の未然防止、早期発見、早期対応に努める。
- ・ 担任、養護教諭、教育相談員担当の連携により、教育相談体制を機能させる。

②相談体制



(2) 生徒指導のねらいと指導体制

① ねらい

- ・ 児童にとって実感のともなう活動ができるよう、どの活動においても価値付けを行い指導する。
- ・ 指導方針の共有、組織的指導を常に意識して指導、支援にあたる。

② 指導体制

手 順	ポ イ ン ト
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin-bottom: 10px;">第一次報告</div> <p style="text-align: center;">↓ (学年主任、主幹教諭へ報告)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○ 事案発生後、直ちに学年主任、主幹教諭に相談・報告する。 (報告の流れ 学年主任・主幹教諭 → 教頭 → 校長) ○ 児童の心を大切にしながら、個別にじっくり話を聞く。
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin-bottom: 10px;">正確な事実の把握</div> <p style="text-align: center;">↓ (生徒指導記録の作成)</p>	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px; display: flex; flex-wrap: wrap;"> <div style="width: 33%;">◇ いつ</div> <div style="width: 33%;">◇ だれが</div> <div style="width: 33%;">◇ どこで</div> <div style="width: 33%;">◇ 何を</div> <div style="width: 33%;">◇ どのように</div> <div style="width: 33%;">◇ なぜ (気持ち)</div> </div> <ul style="list-style-type: none"> ○ 担任、主任等、複数で対応する。 ○ 複数の児童が関連する場合は、一人一人の話を照合して不明確なところを再確認する。
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin-bottom: 10px;">対応の検討</div> <p style="text-align: center;">↓ (担任の原案をもとに協議)</p> <p style="text-align: center;">↓</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○ 事実の共通理解をはかる ○ 課題を整理する <ul style="list-style-type: none"> ・ 不安や障害の除去 ・ 関係児童の指導 ・ 再発防止 ・ 拡大、派生の防止 ・ 保護者、家庭の状況 ○ 解決への道筋の検討 <ul style="list-style-type: none"> ・ 関係児童への指導 ・ 学級、学年、学校全体の指導 ・ 家庭との連携 ・ 対外的な対応
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin-bottom: 10px;">対 応</div> <p style="text-align: center;">↓ (迅速に、丁寧に対応)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○ 児童と保護者の心を大切に丁寧な対応を、迅速に行う。 ○ 担任と主任、主幹教諭を中心に、必要に応じていろいろな立場の職員が関わって対応する。
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content;">見届 け</div>	<ul style="list-style-type: none"> ○ 状況を逐次報告しながら、校長の指導のもとに進める。

9 校内研修

(1) いじめの理解、組織的な対応、指導記録の生かし方等に関する研修計画

- ・ いじめに係る研修を年間計画に位置づけ、学期に一度、いじめを始めとする生徒指導上の諸問題等に関する校内研修を行い教職員の共通認識を図る。
- ・ 特に「特別の教科道徳の授業」の充実、「生徒指導の機能を生かした授業づくり」について研修を深め、いじめの問題の未然防止に努める。

※具体的な計画は学校教育計画による。

10 学校評価

(1) いじめの問題への対応と評価の基本的な考え方

- ・ 学校評価において、その目的を踏まえて、いじめの問題を取り扱う。この際、いじめの有無やその多寡のみを評価するのではなく、問題を隠さず、いじめの実態把握や対応が促されるよう、児童や地域の状況を十分踏まえた目標の設定や、目標に対する具体的な取組状況や達成状況を評価する。また、評価結果を踏まえてその改善に取り組んでいく。

(2) 地域や家庭との連携

- ・ 教育会総会、学年、学級懇談会や学校だより等において、いじめに係る学校基本方針やその取組、学校評価の結果等についてお知らせし、いじめの問題の重要性の認識を広めるとともに、家庭や地域との緊密な連携協力を図る。

(3) 校内におけるいじめの防止等に対するPDCAサイクル 等

- ・ 長・短期計画に基づき、常に組織的な対応による、いじめの問題の未然防止、早期発見、早期対応の取組を徹底し、その都度取組状況を児童の視点で客観的に振り返り改善を図っていく。
- ・ 学期末の職員会議において、いじめの問題への対応について成果と課題を確認しながら改善の方策を明確にし、全教職員で共通理解を図る。

11 その他

(1) 社会参画活動、縦割り活動による自己有用感、自己肯定感の育成

- ・ 地域行事やスポーツイベントへの積極的参加、小・中学校間の連携及び交流、縦割り活動による異年齢交流等を通し、児童の自己有用感、自己肯定感を育成し、いじめの問題の未然防止に努める。

(2) 校務の効率化

- ・ 教職員が児童と向き合い、いじめの防止等に適切に取り組んでいくことができるようにするため、一部の教職員に過重な負担がかからないように校務分掌を適正化し、組織的体制を整えるなど、校務の効率化を図る。